新たな相模原市教育振興計画の策定に向けたシンポジウム
～共に育む未来への力～

平成３１年３月１７日（日）
午後１時３０分から午後４時１０分まで
ソレイユさがみ　セミナールーム１

基調講演：一人ひとりのわくわくエンジンが未来をつくる
～子どもの力を引き出すために～
パネルディスカッション：未来につながる学びについて
～子どもたちの未来を切り拓く力を育む～

○開会あいさつ　　相模原市教育委員会野村謙一教育長

本日のシンポジウムは、新たな教育振興計画の策定に際し、今後の相模原市の教育を市民の皆様と共に考える場として開催するものでございます。

昨年８月に、学識経験者や公募市民等の方々で構成する相模原市教育振興計画策定委員会を設置し、これからの社会の変化を見据えた本市の教育施策の指針となる新たな計画の内容について、現在活発な御議論をいただいているところでございます。

本日のシンポジウムでは「共に育む未来への力」をテーマに掲げております。グローバル化、情報化が急速に進展する社会の中で、未来の創り手である子どもたち一人ひとりが自分の道を見出し、歩むことができるよう、モチベーション、資質と能力を育むことが今後の教育活動の中で最も求められている、このように考えております。こうした視点に立ちまして、本日は「キャリア教育」を話題の中心に据え、議論を進めさせていただきます。

皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○基調講演

朝山　あつこ　氏(認定ＮＰＯ法人キーパーソン２１代表理事)

「一人ひとりのわくわくエンジンが未来をつくる
～子どもの力を引き出すために～」

―わくわくして動き出さずにいられない原動力―

母親として「どうしたら子どもたちが自分を活かして生き生きと仕事をして生きていくことができるか」という問いに１８年間向き合い続けてきました。未来は予測できませんし、不安ばかり煽られてもどうすることもできません。予測できない未来なら、枠の中に子どもをはめ込むのではなく、子どもたちが、今ある枠を超えて未来を創るような人になっていくために、一人ひとりが持っている、わくわくして動き出さずにはいられない原動力のようなものーこれを私たちは「わくわくエンジン」と呼んでいますがーを、子ども自身に気づかせることが大切だと考えています。この「わくわく」を実現するためには、それが何であるかを明らかにする、つまり、子どもたちが「自分が何者であるかを語る力」を身に付けるとともに、「協働のコミュニケーション」により、社会とのかかわりの中で、自ら進んでいくことのできる力を育むことが重要です。

―自分で考えて選択し行動する力―

平成１２年にキーパーソン２１という任意団体を設立し、子どもたちが「わくわくエンジン」を大切にして、自ら主体的に動けることが当たり前の社会をつくる活動をしてきました。その中で、「夢！自分！発見プログラム」というものを開発し、学校や地域等と連携しながら、これまでに４万５千人以上の子どもたちに提供してきました。プログラムはゲーム形式で、楽しみながらチームで行うもので、子どもが自分で考えて選択し行動する力を育むため、大人は「教える」ことはせず、子どもの中にある「わくわくエンジン」を引き出すようにしています。

―引き出し、認め、伴走する―

プログラムに参加したＡ君、Ｂ君、Ｃ君。３人とも野球部で、わくわくするものは野球。そうすると大人はすぐに「将来は野球選手に」と職業につなげたがります。３人ともその時はまんざらでもないのですが、どこかで野球選手にはそう簡単にはなれないと気付きます。そもそも職業というのは時代と共に変遷するものです。この先なくなってしまうものもあれば、新しく生まれるものもあります。既存の職業と子どもを単純につなげてしまうことは、子どもの可能性を狭めることにもなります。ポイントは「わくわくエンジン」で考えることです。「野球のどこにわくわくするか？」を尋ねました。すると、Ａ君は「作戦や戦略を立てることが面白い」、Ｂ君は「チームで何かを達成するために自分が役に立つことが嬉しい」、Ｃ君は「素振りや筋トレをすることで、自分の成長を実感することが楽しい」というように、それぞれが異なる「わくわくエンジン」を持っていることがわかります。戦略づくりにわくわくを感じるＡ君についていうと、先生から「運動会の騎馬戦で隣のクラスに勝つための作戦を考えてくれないか」と頼まれれば、きっと一生懸命になって考え始めます。人はわくわくすると能動的になれるのです。大切なことは、一人ひとりから、丁寧に「わくわくエンジン」を引き出し、それを認めること。そして、何かを教えるのではなく、子どもに寄り添い伴走していく姿勢だと考えています。

○パネルディスカッション

コーディネーター

酒井 朗 氏(上智大学教授・相模原市教育振興計画策定委員会委員長)

パネリスト

朝山 あつこ 氏(認定ＮＰＯ法人キーパーソン２１代表理事)

幡野 泉 氏(アイケーブリッジ外語学院代表取締役)

神谷 昌義 氏(相模原市立小中学校ＰＴＡ連絡協議会会長)

野村 謙一(相模原市教育委員会教育長)

テーマ

「未来につながる学びについて
～子どもたちの未来を切り拓く力を育む～」

酒井 朗 氏

幡野 泉 氏

神谷 昌義 氏

―子どもを「認める」ことの大切さー

酒井： ここからは多彩な経験をお持ちの方々とともに、子どもたちの未来を切り拓く力をどのように育むかをテーマに議論したいと思います。幡野さんはご自身で起業した会社を経営されていますが、どうして起業にチャレンジしようと思ったのですか。

幡野： 海運会社に勤めている時、大学の先輩に職場などの悩みを相談したら、「自分で事業をやってみたらどうか。あなたならできそう」と言われまして、考えるようになりました。

酒井： その言葉がきっかけとなったわけですね。「自分ならできる」という可能性に気づかせてくれて、だんだんと自信になっていったということでしょうか。自信を持ったり、行動につなげる原動力というようなものの根底には、自己肯定感というものがあると言われています。これは、幼少期から育まれていくものなのですが、ご両親との関係では、何かエピソードはありますか。

幡野： 両親は、大学進学はもちろん、習い事の機会などもない環境で育ったので、私が何をやっても「すごいね」と褒めてくれました。そのことが今の自分の前向きな姿勢につながっているのかもしれません。

酒井： 子どもを褒めて自信を持たせること、転機の時には背中を押してあげることが大事だということですね。神谷さん、コーチングというご職業の立場から「褒めること」についてお聞かせください。

神谷： 相手がどこを褒めてもらいたいか、認めてもらいたいかを考えること、そして、（褒める立場の人が）自分の良いところを知っていることがポイントです。人は自分の駄目なところを見てしまいがちですが、自分のことが認められないと、他人のことも認めることができません。

朝山： 「褒める」というと、大人の考えで何ができて、何ができないという枠に子どもをはめるような感じがします。子どもを自分と対等な存在として、子どものありのままを「認める」という方が好ましい感覚ですよね。

酒井： 「褒める」より「認める」ことが大切であるということですね。

―大人が「わくわく」することから―

酒井： 小中学校ＰＴＡ連合協議会会長の立場から、感じていることがあればお話しください。

神谷： 子どもに何を教えるかの前に、大人たち自身の姿勢が重要です。子どもたちに夢や目標がないのは、大人が疲れた背中を見せているから。わくわくしながら日々過ごしている背中を見せたら、子どもたちも変わっていくと思っています。

酒井： まずは大人がわくわくしていることが、子どもの教育にとって大事だということですね。朝山さん、このことについてはいかがですか。

朝山： 神谷さんのおっしゃるとおりで、これは大人の問題です。先生や大人がわくわくしながら日々を過ごすことで、子どもの中にあるわくわくを引き出せるようになります。また、子どもの良いところを認められるようになるためには訓練が必要ですが、訓練すればできるようになります。大人がその力をどれだけ付けられるか、ということです。

酒井： 最後に、野村教育長、今後の教育の展望についてお考えをお伺いします。

野村： 「温かさと先進性」をキーワードにして、子どもたちの未来を切り拓く力を育むこと、市民の皆様が生涯にわたって学び、活躍できる環境をつくることが、教育分野での大きな考え方になります。今後策定する計画が、実行性のあるものとなることを強く願っております。

※経過報告で使用した資料や、計画策定の状況は、
下記ホームページにて御覧いただけます。
計画に関するご意見等もこちらからお寄せ下さい。

市ホームページ

http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kurashi/kyouiku/shisaku/1016029.html